

さいたまここに人あり



川口太陽の家所長 松本 哲 さん

川口太陽の家は、障害があっても安心して暮らし、働けるよう、1986年に開設しました。その活動はウエスづくりにとどまらず現在ではアートの分野にまで広がり、工房「集」を開設。昨年9月、東京都美術館で工房集の作品展「生きるための表現」がひらかれました。工房集では障害がある仲間が、絵画や手芸、さおり織りなどの制作活動をしています。その独創性あふれる作品が、各地で高い評価を得ています。

「太陽の家があるから大丈夫」
と言われる施設に

こんないい仕事があるんだ

大学の専門は酪農で、北海道の牧場で働きながら大学に通っていて、卒業したらそのまま北海道でお百姓をやろうと思ってました。それまでボランティアもしたことがなかったし、二十歳になるまでこういう世界があることは何も知らずにいたんです。

大学の休みのときに、知り合いに「どこかアルバイトはないか」って聞いたたら、間に入った中学の恩師が勘違いして「川口養護（学校）に行けばアルバイトがあるよ」って。川口養護がどういうところかも知らずに行つて、太陽の家の初代理事長の鈴木利勝先生と出会ったんです。

鈴木先生はボランティアの面接のつもりが、こっちはアルバイトだと思っていたから、ほんとに噛み合わない面接でした。「知恵遅れって分かる？」って言われて、「はあ、知りません」って言ったらすごくビックリして。「じゃあ身体障害は分かる？」って言われて、それも「知らない」って答えたら、天を仰いで…。

当時、川口養護は教員が腰痛でバタバ

タ倒れていた時期で、男手が欲しかったみたいです。「給食食べさせてあげるから来ない？」って言われて、暇だったから「行きましよう」ということになりました。

ある日、朝マラソンで一人が行方不明になって、その子が校舎裏の倉庫にいた。「どうしたの」って聞いたたら、「マラソン嫌い」って。「ああ、自分と変わらないな」と思っただけです。それが一つのきっかけです。

ボランティアは昼間だけ子どもの相手をしていればいいから、こんな楽な仕事があるんだって思った。お百姓やってた

から身体を動かすのは全然苦じゃなし、動物もひと好きだったから、素朴にこんないい仕事があるんだって思いましたよ。でも、自分が帰ったあと、先生たちがいかに苦労していたか、知らなかったんだよね。

先生たちはよく、「今はこの子たちも公教育が保障されているけど」という話をしていたんです。学校を出たあとが相当大変だつていう印象は残ってました。それで、今から思えば、若気の至り。ってやつで、自問するわけです。この子たちが将来大変になったときに、自分は安全な場所において「政府が悪い」「政治が悪い」と言いながら暮らすのか、一緒に汗を流しながら暮らすのか。当時は若いから、「苦しいほうを選ぶべきじゃないか」と思って、今にいたるわけです。

社会の一員であってほしい

最初に県外の施設に勤めたときは今から30年も前で、「愛される障害者づくり」と真剣に言われていた時代です。初出勤の日、所長に「言うことを聞かないのがいればひっぱたけばいい」と言われまし

た。障害者は従順で挨拶だけできけばいいって。スタートが川口養護（教育権保障の運動で設立された）だったから、ビックリして。当時は社会全体で人権意識が弱かったから、一番遠いところにいた

んでしよう。

そこでの2年間でたくさんのことを学ばせてもらったけど、当時はうんと辛かったですよ。「殴れ」って言われと、「年配者は敬うべきだと思う」「指導だと言っても、自分を上回るひとが出現すれば教育的意味はないと思う」と言ったんです。タイムマシンがあったら自分を褒めてやりたいくらい良いことを言ったのに、「生意気だ」といじめにあいました。

その施設を辞めるとき、鈴木さんという60歳くらいの女性が「松本が一番良い職員だった」と言ってくれたり、いつも風呂に入らない高木さんという男性が私



太陽の家での作業は、古着などを裂いてウエスにしている

となら入るって言うてくれて、昼間から一緒に入ったり。どこを向いて仕事をすればいいのか、確認させてもらいました。

辞める直前に、ある親御さんから「伝えておきたいことがある」って呼び出されたんです。「息子が50、60歳になった時、大学出たての職員に呼び捨てにされる。切なくてかなしい」とこんなこと話して、「障害を持つ子どもの親には共通の願いがある。それは自分の子どもも社会の一員であってほしいということ。それは働くことだ」って言われたんです。

当時、施設では商品券の箱を折る仕事をしていて、お歳暮とかお中元の時期にドサツと来て、みんな必死でやるんです。ある日、所長に呼ばれて「誰と誰を散歩に連れ出せ」と言われる。「何ですか」

と聞くと、「あいつらがいると仕事にならない」って。

親が、うちの子も働かせてほしいとか、一人前に扱ってほしいという思いがあっても、それを言えない時代。言えは、「辞めればいい」と言われちゃいますから。

太陽（の家）に來たきっかけは、そういう障害が重い人でもできる仕事はないかと思つて。川口養護の先生たちが中心になつて、そういう仕事を始めたつていうんで行つたら、「来てくれないか」つて言われたのがスタートです。他の職員たちも、以前の施設で同じような思いがあつたので、「いい実践をしよう」と。いい実践をすれば、初めの施設で出会つた仲間たちの幸せにつながるはずだと言いながら、30年間やってきました。

間違いなく育つてゐる

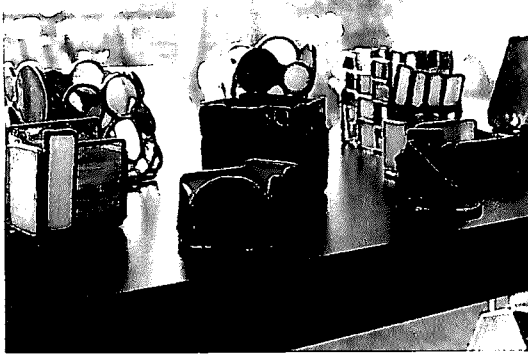
川口養護や浦和養護（学校）のエース級の人たちが、行き場がなくて太陽にやつて來たので、そういう意味では手本になるものではなくて、やる気だけで一生懸命実践してきました。

パニックを起こすAくんは、取っ組み

合いをして、気づいたら失禁していたんだよね。「おしっこしたかったの？」つて聞いたら「はい」と言つて、ウソみたいに静かになつて、「言えはよつたのに」つて二人で泣いた。お母さんと話すと、彼は義務化の前に学校に通つてたから、

学校で体罰を受けていたみたいで、帰ってくると裸にして傷がないか調べるのが日課だったそうです。最初に会った頃は、男の人を見ると窓から逃げ出すくらいだったんです。ファイティングポーズをするか、我々の手をとるか。男のひとが手を上げると殴るって学んじやったんだよね。その姿はすごく切なかったです。

Aくんは人に興味を示さないで、レコードを33の3分の1回転くらいで何度も聴くわけです。一日中、ひたすら。よく同僚の高橋さんと、なんとか人間に興味を持ってくれないかって話していて、彼



仲間がつくったステンドグラスの作品

が帰ると二人でそのレコードを聴いて歌を覚えて、彼の前で歌ってみせて。お陰で送迎中ずっと歌わせられました。そんなふうに関係が積み上がっていききました。

Aくんのお母さんが太陽を信用してくるの、旅行とかで二人で寝っ転がったり並んでいる写真を見せたとき、「A

方法論じゃなくて、人間関係

浦和養護の卒業生のBくんは、出会ったときは思春期のもつれから不安定で、グーで自分の顔を殴りつけていたから、顔の原型が分からない状態でした。一日抱いていてやらないと、どうにかなっちゃうという感じでした。かといって、彼を落ちつかせる実践は日本全国になくて、よく高橋さんと言っていたのは、「AくんやBくんは、下手な施設に入れられ

たら、薬でおしまい」って。

彼と出会って2年目、同僚の高橋さんと沢田さんと私が、「今年はBくんの年にする」って決めたんです。具体的にどうするってなつて、仕事どころじゃないからとりあえず散歩に行ってみたらどう

が父親以外の男の人にこんなに気持ち悪くすようになった」って。

いま区分認定調査というのがあって、終わってから区役所の人に、「うちの息子は区分として一番重いでしょう。でも、間違いない育つてる」って言ったの。「息子が育つたのは職員のおかげだ」って。そこで職員が泣いたんですよ。

かということ、毎日彼が来ると土手まで歩いていつて座つて、というのをやりました。

当時、30人の障害の重い人を6人の職員で支えていたから、私がBくんと散歩に行くと、29人を5人で支えることになる。「忙しいのに何やってんだ」って言われるところを、みんなが「がんばつてきてね」って送り出してきて。

それをどのくらい続けたかな。当然、彼は言葉もなくて、自傷も止まらない。でも、二人で土手でゆっくり時間を共有していると、彼もあんまり自傷をしなくなりますよ。

私が「なんでいつも怒ってるの」って

聞いたら、目が合ったんです。障害がある人って、なかなか目が合わないんです。そのとき、「今、心がつながった」って、鳥肌が立つ体験をしました。彼が私の口元に手をかざしてきて、「なにか伝えているんだな」って思いました。

その日の日誌に「多分水が飲みたいか、歌を歌ってくれって言うてるような気がする」って書いたら、お母さんから返事が来て「それはBが私にしかやらないサインだ」って言うんです。「歌を歌えてことです」と。そのとき思うに、彼が親以外の人に要求を出した、ひとつ壁をのりこえた瞬間に立ち会えたんだな



工房集で、それぞれ絵を描いている

と思いました。お母さんが、息子は「365日のマーチ」の歌が好きですって書いてくれたんで、試しに歌ってみたらBくんの機嫌が良くなつて。そのあたりから、彼がずいぶん穏やかになっていきました。

仲間は太陽の家の宝

浦和養護卒業生のCさんは、学校大っ嫌いだったんだよね。女の子だからバレッタ（髪留め）をして学校に行ったら取り上げられて、高いところにぶら下げられて「我慢しろ」って言われる。「学校」

って聞くと大パニック。自閉症もあるから、パニックを起こすと、ベテランの職員も泣き出すくらいでした。

でもBくんが学んだから、まず仲良くしようと思って一緒に散歩に行ったら、私より花の名前を知っている。季節ごとの歌も歌ってくれる。仲良くなつていくと、絵も描いてくれた。

私は悪しき美術教育を受けたから、絵を描くのが憂鬱だった。でもCさんは、楽しそうに絵を描き続けてくれた。この才能で社会参加を考えようって思いまし

障害者実践つてずいぶん科学的に具体化したけど、実践をはじめた頃の人と話すとき、みんな「方法論じゃなくて人間関係」って言うってなんです。やっぱり障害の重い人と出会ったときは、まず仲良くなることです。

た。東京都美術館につながるきっかけをつくったCさんは、太陽の宝です。

Cさんが東京都美術館に行ったら、職員が寄ってきて握手を求めるの。「この絵の作者に会いたかった」って。お母さんに、「絵の前でみんなの感想を聞いてごらん」って言ったら、しばらく聞いていて、お母さんが泣きながら「この子を生んで初めて褒められた」って。彼女のお母さんはそれまで、行事があるとCさんに施設を休ませるんです。「迷惑をかけるから」って。残念ながら、これが日本の福祉の現状なんです。

障害がとても重い人とか、困難が大きい人たち。そういう人たちは、振り返ってみると、実践的には太陽の宝になりました。

大事にしてくれる人がいる安心感

私が人間関係にこだわるのは、3人の子どもの一番下の子が未熟児で生まれてからなんです。31週の1600グラム。女房が敗血症で死にかけたので出産したんだけど、生まれたときには胃も腸もまだできていなくて、すぐに岩槻の小児医療センターに搬送されたんです。ものすごくショックでした。

医者と呼ばれて、「この子が将来歩けなくてもしゃべれなくてもいいということにしてほしい」と言われました。そこ



さおり織りも（工房集）

から1カ月、毎日「今日が山です。これが乗りこえられなかったら死にます」って言われたのもショックでした。

結局「おたくの子、障害がありますよ」って言われることと等しいでしょ。「やだな」って気持ちに出会ったんです。太陽でえらそうなこと言ってたのに、自分には彼らをバカにしたり、嫌ってたのかと、ものすごく悩んだ。随分考えて、どう考えても誰も嫌いじゃないんです。ああ、家族として障害のある子を育てていく困難さが分かってるから、たじろいであるだつて。みんな、親たちはこういう思いをしたのかあとと思いました。

毎日「明日死ぬかもしれない」って言われてると、名前が付けられなかったん

死にそうになっていた女房から「啓はどうなるの」って詰め寄られたとき、「太陽があるから大丈夫」って言っちゃった

人を信頼したり、愛せる人に

です。そのときに、看護師が私を呼び出して、「お父さんが今やらなければいけないことは、この子が人間だということとあなた自身の子ともだということを認識することです。まずは名前を付けてあげなさい」って、怒られたんです。あまりにも怒られるんで、帰りに本屋で「幸せになる」みたいな字画の本を見て。一生懸命考えて「啓」という名前を付けたら、やっぱり心境が変わりましたよ。

しばらくして医者に「胃ができたけど消化できなければアウトです。鼻の管から母乳を入れて、消化できなかったら覚悟してください」と言われました。次の日、看護師から「啓ちゃん、消化しましたよ。褒めてあげてください」って言われたとき、すごくうれしかったんです。当たりまえに人として大事にしてくれる人がいることが、親としてこんなに安心でうれしいんだって実感しました。

んです。この子が社会に出るまでに太陽を日本で一番いい施設にしてやる。だから大丈夫だ、って。その時に思ったのは、



ボールペンやえんぴつなどで描く（工房集）

建物はどうしたって公立の施設にかなわないから、「職員だ」って。どの職員も、どの仲間も大切にしてくれる施設にしよう、個人的だけど、強く意識した瞬間です。

それからの私は、職員にとってイヤな上司だったと思いますよ。パニックを起こした仲間に職員が「何やってんの」って言ったとき、「『どうしたの』って聞いてあげて」と、職員に徹底的に話して、見せた。うちの施設で「キリ」でも、他の施設では「4番のエース」になるくらいの職員集団をつくらないと、障害の重い人たちの生活を支えられないと。職員

●「実感」～やっぱり、仲間はおもしろい～

- *2013年
2月23日(土)～25日(月)
10時～18時
- *オープニングパーティ
2月23日(土)15時～17時
- *カフェ:全日オープン



●「渡邊あや」個展+
都美術館セレクト「関口忠司・箕田哲実」展

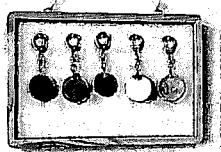
- *2013年3月5日(火)～15日(金)10時～17時
- *オープニングパーティ 3月9日(土)15時～17時
- *カフェ:土日のみオープン

工房「集」

- *埼玉県川口市木曽呂1445
- *電話 048-290-7356

●工房集の
ステンドグラス

- *2月末まで(予定)
10時～19時
- *1階の喫茶にて即売



日本茶喫茶・ギャラリー 楽風(らふ)

- *埼玉県さいたま市浦和区岸町4-25-12
- *電話 048-825-3910

私たちは、ほんとによくやってくれました。

この施設は、家族がいて、仲間がいて、職員がいて、トライアングルだって言われるんですね。どこかに過重な負担をさせてはいけないし、みんなを支える。

昔は、「愛される障害者」って言うって、たけど、人のことを信頼したり、連帯感をちゃんと持てる人、人を愛せる人が幸せになるよね。

国は、障害のある人にも社会貢献をしろって、はっきり言いはじめたでしょ。私は国が大きな権限をもって、「あなた

はこういう人間になれ」って言うことに違和感があるんです。豊かになれっていうのは分かるけど、税金払えるようになっていうのは不愉快極まりないよね。だから、学校がハウツーっぽくなっちゃうんだよね。

夏休みくらいになるとよく学校の先生に、「卒業までどういう力をつけたらいいか」って聞かれるんですよ。私は、それは違うと思います。これまでどう育ってきたのか。あとはこう託したいということを言っただけです。